学社融合実践に関する研究

学社融合実践研究会

Ⅰ．学社融合の基本性格（猪山）

1．21世紀の教育システムの創造と学社融合

2．学社融合実践の展開

3．学社融合推進システムの創出

4．学社融合と地域コミュニティの創造

Ⅱ．子どもの『生きる力・社会力』をはぐくむ学社融合実践

1．学校教育活動

（1）教科指導における実践（浦川）

①　音楽科における実践（城戸）

②　社会科における実践（金谷）

③　社会教育施設における実践（浦川）

（2）道徳における実践（相川）

（3）特別活動における実践（城戸）

①　クラブ活動における実践（金谷・城戸）

②　学校行事における実践（沖崎）

（4）総合的な学習における実践（長田）

①　「進め！小佐々の海の調査隊」（5年）の取組（鈴田）

②　「横尾だんじり」（4年）の取組（金谷）

2．地域からのアプローチ（岡田）

（1）　幼稚園・小中学校への外部講師派遣

（2）　生涯楽習～学校へ行こう～

（3）　学校支援ボランティアの養成

（4）　小・中学校の生涯学習主任

Ⅲ．学社融合を進める推進システムの整備（浦川）

1．推進システムの整備

2．コーディネーターの設置とサポーターの育成

3．地域教育資源のプログラム化

4．情報の提供

5．団体とのネットワーク化

6．企画への参加

学社融合実践に関する研究会（執筆者所属）

猪山勝利（長崎大学教育学部），浦川末子（長崎県教育庁生涯学習課），岡田政宏（勝本町教育委員会），長田慎太郎・鈴田英則（小佐々町立楠栖小），相川節子（時津町立時津北小），金谷玲子（長崎市立横尾小），城戸弘史・沖崎太蔵（長崎市立浪平小）

Ⅰ．学社融合の基本性格（猪山）

１．２１世紀の教育システムの創造と学社融合

２１世紀になって、経済、政治、文化など社会の構造的変化が求められる時代を迎えて、教育システムも構造的変化を求められる時代になってきた。世界の各国は２１世紀に入って、２０世紀後半から提唱されてきた「学校補完型」生涯学習政策から、教育システムを「総合的」生涯学習体系へ移行させていく教育改革を推進しつつある。

学校主導型の２０世紀教育システムは、こどもの学力を育成する効率的教育システムであったが、近年、こどもの主体的、協同的な「生きる力」を育成するには限界があることが明らかになってきた。２１世紀のこどもの教育は生涯学習の視点から把握しなおし、人間の発達の基底を育成するとともに、生涯にわたる学習の基盤を育成することが求められつつある。そのためには教育展開の場は学校教育だけでなく、家庭教育、社会教育、地域社会の教育が総合的にシステム化されることが不可欠になりつつあり、さらに、教育と（地域）社会の融合が求められ始めている。

その主導的な教育システム施策が《学社融合》施策であり、学社融合とは、「こどもの主体的・協同的な『生きる力』を育成するために、学校教育、家庭教育、社会教育、地域社会教育が融合して教育協同システムを形成するとともに、教育システムと地域社会を連関させていく２１世紀の教育システムの創造施策であり、学社融合推進活動は教育再生と共に地域コミュニティの創造に寄与する」と言える。

学社融合推進は学校教育への地域社会や社会教育の支援であるとする２０世紀の学校主体主義の修正的言説があるが、上記したように、現代的学社融合はこどもが主体的、協同的な「生きる力」を形成するために、教育機関や教育諸組織が相互に連関し、協働していくことである。したがって、家庭教育、学校教育、社会教育、地域社会の教育がそれぞれ独自な固有の現代的教育力を再生すると共に、相互支援や協働活動を推進することである。

上記１のように学社融合の基本性格を把握すれば、学社融合実践は２つの教育実践領域を推進することであると言える。１つは、こどもの主体的、協同的「生きる力」の育成であり、２つはこどもの学社融合推進に関わって、諸教育機関、組織の教育力の再生、向上である。後者の教育力の再生、向上なくして、こどもの教育再生はなく、それぞれの教育課題は学社融合推進の同時、併行的教育実践領域である。すなわち、各教育組織の教育力の再生を推進しなければ、２０世紀の学校主体主義教育システムのように学校教育依存の教育組織活動になり、他の教育組織は若干の学校支援をする活動に止まる。したがって、学社融合推進活動は、各教育組織の教育力を高めつつ、学校肥大型の教育機能の再編成を推進すると共に、各教育組織間の教育協働活動を推進していく実践を展開するのである。

２．学社融合実践の展開

こどもの主体的、協働的な「生きる力」を育成する学社融合実践は、以下のような基本点を踏まえて、推進することが求められる。

（1） こどもの主体性

こどもの自発的な主体性を基本とすることである。すなわち、教育活動の展開場面だけでなく、計画や企画、展開後の評価へもこどもの参画を導入することである。

（2） 指導・支援性

（1）とも関連して教師や住民の指導性とともに「支援性」を強化していくことである。すなわち、学社融合活動の教育性は「指導・支援」性と言えよう。

（3）学習と活動

学習を主体としながらも「実習」を超えた具体的活動を展開することである。しかも、その活動は具体的社会参画活動として展開することが望ましい。この点、従来の学校教育主導教育では「学習止まり」であった教育の性格を転換することである。

（4）創造性

学習や活動に「創造性」を内包することであり、既存の知や技術の伝達だけでなく、創意性のある学習や活動を展開することである。

（5）交流・協働性

こども同士、こどもと教師、こどもと地域住民の交流性や協働性を重視することである。

3．学社融合推進システムの創出

２０世紀の学校主体型教育システムが現在も継承されているため、教育関係者の意識として学校主導性への期待やその裏返しの学校依存意識が強固にある。そのため、学社融合活動さえ学校主導で展開することを求める人々も多いのが現状である。この意識を転換し、学社融合システムを形成していくには、新たな学社融合推進システムの創出が不可欠である。

学社融合推進システムは、Ⅲで詳細に言及するが、基本となる学社融合推進システムとしては、こどもの保護者代表、学校代表、社会教育機関代表、地域社会代表の４者から構成される学社融合推進委員会が組織化される必要がある。場合によっては、こども代表を加えることもこれからの課題である。

学社融合推進委員会は、学社融合推進の計画策定、広報・情報、学社融合推進人材の育成と活用、対外関係活動を行う基本組織であるが、そのシステムを運営するためには、学社融合推進コーディネイターが配置される必要がある。この基本委員会の下に、施設管理委員会、情報委員会、人材育成活用委員会などの活動推進委員会を組織化することである。

4．学社融合と地域コミュニティの創造

学社融合の推進は活動的地域コミュニティに支えられて活発となるが、学社融合推進活動が活発になれば、地域コミュニティも活性化されるというように、両者は相互規定関係にある。学社融合推進活動が地域コミュニティの活性化を規定する要因としては、こどもを核として地域住民の交流性や協働性が高まること、学社融合推進活動が地域環境課題、地域健康課題、地域国際交流課題、地域情報課題など新しい社会創造課題を発見させる基因となることなど地域コミュニティの創造に寄与する。

Ⅱ．子どもの『生きる力・社会力』をはぐくむ学社融合実践

1．学校教育活動

(1) 教科指導における実践(浦川)

地域には各教科の特定分野の内容に精通した人がたくさんいる。それらの専門性を教科指導に生かすことによって，学習をより効果的なものにすることができる。また，市町村の小学校で地域の専門的な知識や技術を持っている人と教科研究プロジェクトチームを創って地域の教育資源の活用方策について検討したり，学習プログラムを開発したりして，学習内容の一層の充実を図ることもできる。その際，授業の全てを地域の人に任せるのではなく，教師と適切なチィーム・チィーチングによる展開が望ましい。教科における展開では，例えば，俳句や短歌の地域指導者による国語との融合学習や理科においては，日本野鳥の会や山野草の専門家と生態系に精通した専門家及び天体観測に専門的な技術などを有する人との融合学習もできる。以下音楽科と社会科においての展開を紹介してみよう。

① 音楽科における実践(城戸)

＜ゲストティーチャー＞

長崎市立浪平小学校では，平成10年度から保護者や地域住民の中から広く人材発掘を行い，ゲストティーチャー（以降ＧＴと表記）として授業に関わっていただけないか，指導をしていただけないかを模索してきた。小規模校である本校であるが，平成9年度末には創立120周年を迎えるなど古い歴史をもち，記念式典ではＰＴＡや連合自治会からの協力体制も大きな力になっていることがその下地にあった。

まず手始めに，長崎のオペラ協会にも属する声楽家で，自宅でピアノ教室もされている本校の保護者に白羽の矢を立て，長崎市の小学校音楽会に参加する学級の音楽の指導に入っていただくことにした。彼女は過去にＰＴＡの副会長として密接な関わりがあり，ピアノ教室では地区の子どもを指導していた。そのため，積極的にこちらの意図を受け入れ，持ち前の指導力ですんなりと授業にも溶け込んでいった。

人材発掘と一口に言っても，「自分はこのことに長けています」と表だって言える人物は，よほどの自信家か，周囲からなんらかの評価を受けている人(表彰や各種賞を受けるなど)だと思われる。この手の人にゲストティーチャーを受けてもらうのは，報酬面等の障害もでてくる。学校教育においてのゲストティーチャーは，ボランティアが基本であるため，隠れた有能な人材を発掘することが大切になってくる。そのための家庭や地域への情報網をいかに張り巡らすかが重要になってくるであろう。

ただ実際に探してみると，以外と身近なところに人材はいるもので，家庭訪問の際の意外なひとことや，懇親会などの交流の場での情報により，保護者の過去や特技を聞き出し，さりげなく誘っていく。この方法で，現在本校では教科指導において音楽に４名，書写に１名，家庭科に１名のＧＴを加えて，多人数で子どもの指導に当たることが可能になっている。

＜カリキュラム編成への参画＞

本校は，小規模校の特性を生かして，低・中・高学年別に指導を行っている。ここで

は高学年の例を見ていく。子どもの人数は合わせて41人，指導者は担任２人とＧＴ２人の合計４人で，毎週水曜日の午後（４・５校時）に授業は行われる。５・６年合同で授業を行うため，市教育研究所から出されている年間指導計画２学年分を基に，本校独自のカリキュラムを編成するわけだが，ＧＴは，その編成時から入ってもらっている。そのため，小学校の音楽教育でこれまでおざなりにされてきた創作活動(作曲などの)や，リズム感を養う活動についても，年間を通して専門的な立場から指導してもらうことが可能になった。また，単なる担任の補助者としてのＧＴではなく，むしろ前に立って積極的にリードしてもらう形で指導する形態もとっている。つまり，教師がコーディネーター役となり，ＧＴが主体的に参画しいるわけだ。

このような形態がとれるのも，指導計画を作成する段階から授業実践そして評価まで担任と共に取り組んでいるためで，授業では専門性をいかした発声練習やリコーダーの基本，子どもが音楽で表現力を高めるために大切な技能面での指導はもちろん，グループ別の活動や個人指導などきめ細かい指導など，充実した授業が毎回行われている。

＜成果と課題＞

子どもはこのような授業を通して，音楽のより高いレベルでの楽しみ方を学んでいる。このことは，本校のＰＴＡが主催する「名月鑑賞会」（グラバー園の夜間開放を利用して月を見ながら，すばらしい演奏を聴いて楽しむ行事）の際，子どもから出演者を募集したところ十数名の子どもが参加を申し込み，昼休みや放課後などの時間を使い練習を重ね素晴らしい発表ができたことからもうかがえるところである。また，その活動が本校の中学校区近隣４校で構成する四校連絡協議会主催のクローバーコンサートでも披露することができ，子どもの自信になると共に一連の充実した活動につながってきた。

一方，ＧＴの側からすると，授業に参加することによって自分の再確認ができるという効果があがっている。学校から必要とされていることを感じることにより，単に一保護者「○○さんのお母さん」だったのが「○○先生」と呼ばれることになり，自分という存在に自信を持つことができるわけである。その方の実子にしてみても，母親という存在の偉大さを新たに感じることにもなるわけだ。また，子どもと接し活動することにより，エネルギーを受け取り若々しくなるということもあげられるであろう。加えて，我が子だけでなく子供の友達とも深く接することで，地域全体を大きな意味での家族という枠組みで考えることができるようになり，核家族化・単家族化が進む現在社会の中で失われてきた大きなものを取り戻す一つの布石になり得るような気もする。

以上のように学校の教科指導でＧＴに入っていただくことは，専門的な技術・知識を持つ人を含む多人数での指導が可能になることで，より細かな指導や個に応じた活動もできるようになるばかりでなく，地域力の向上・活性化に一役買っていると言えるであろう。社会が子どもを育み，子どもが社会を活性化させる，こういう相乗効果の図式が浮き彫りにされてくるのではないだろうか。

② 社会科における実践（金谷）

＜横尾地区ふれあいセンター＞

６年生の政治学習の単元では，「身近な公共施設の建設には地方公共団体や国の政治の働きが反映している。」ことを理解させることを主なねらいとし，「地域住民の願いを取り入れながら，また長期的な見通しを立てながら望ましい施設が決定され，実行されていることを捉えさせる必要がある。本単元のねらいを達成させるために長崎市立横尾小学校の竹市教諭は，「横尾地区ふれあいセンター」を取り上げた。

「横尾地区ふれあいセンター」は，市が平成元年度から市内各地に建設している公共施設の１つである。公民館的な施設が少なかった横尾地区では待望の施設であった。まさに地域住民の声，願いをもとに建設された公共施設である。また，市は本施設を建設するさい，今後の高齢化社会を見通し，老人デイサービスを併設した経緯もある。この単元のねらいを達成するために，この施設を教材として，検証段階での調べ活動や体験活動をとりいれていった。

＜学習の実際＞

単元の１時間目に問題把握の段階では，施設長・市の福祉総務課長・老人デイサービスセンター施設長をゲストティーチャーに迎え，事実認識を行い「長崎市は，なぜ，ふれあいセンターを完成させるのに３年以上もかかったのだろうか。」という問題を持たせた。子どもたちは，ア・「いい施設を作るため」「みんなに喜ばれるものをつくるため」に何度も話し合ったのではないか，イ・「何か困難な問題があったのではないか」という予想を立てた。そこで検証段階で実際にア・施設の見学　イ・利用者へのインタビューウ・３人のゲストティーチャーへ尋ねる。という検証計画を立て，検証を行っていった。

施設見学では，ボタンの位置，点字での表示，声のガイダンス，フラットなフロアーなど利用者の立場にたった設備であることを実感した。「利用者の気持ちを実際に感じ取ろう」とおこなった体験交流活動では真美フレッシュ，ヘルシーダンス，サンビー体操，民踊教室を受講させていただいた。一緒に活動したり，参加者の感想を聞いたりすることから，利用者が本当に楽しんでいることを知ると共に，体験したことで実際に自分がその楽しさを味わうことができ，実感を伴ったより深い検証ができた。また，老人デイサービスの方々との交流では，はじめは，なかなかはなすことが見つけきれず戸惑う場面も見られたが，時が経つにつれて会話が弾み，お互いに楽しく過ごすことができた。「面白かった。僕の隣のおじいさんにふれあいセンターに来るのを楽しみにしていますかと尋ねたら，ダンスを早くやりたくて我慢できない』とおっしゃった。ふれあいセンターができてお年寄りの方々は嬉しいと思っていると思う。お年寄りは，センターができる前まではおそらく家で黙っていることが多かったのだろう。センターができてからはおじいさんやおばあさんは毎日が楽しみだろうなと思った。」という感想に代表される通りやはり直接的体験交流を通すことは，子どもたちが主体的に実感を伴って学習を進めるのに大変有効であると考える。

〈学社融合の視点からの成果と課題＞

指導計画８時間の中の６時間という大半を使っての学習であった。ふれあいセンターを学習の場としたことで，ふれあいセンターを身近なものに感じ，一人の地域住民として今後の利用を考えている子供たちもいた。センターには，図書館も併設してあるのだが，この図書館の活用も増えていった。さらには，卒業前のお別れ集会を行う場所としてふれあいセンターを考え，手続き一切子どもたちで行い，会場として利用することになった。　地域の施設を教材化することは，学習を子どもたちの手元に手繰り寄せ生きた学習を展開することができる。さらには，　人との交流を通して学ぶことは前述の通り，自分の実体験を通して感じとり，利用者の生の声として理解することができるのである。また，ゲストティーチャーの活用では，それぞれの専門分野の方々の生の声が学習に生かされ児童の関心が低下することでなく充実した展開ができた要因でもある。

この取組は，比較的知識注入型，あるいは机上の学習になりがちな政治学習をいかに身近なものにし，多用な学習スタイルを保証するかという視点に置いたものであった。

今回の実践で，地域の方々と接する機会を設けることができたことは，地域社会で生きている児童の今後の成長にとってとても有意義なことである。この実践は6年生の政治学習として取組みが続けられている。

③　社会教育施設における実践（浦川）

＜社会科と郷土館（博物館）との融合学習＞

豊玉町には、「文化の郷」と言う愛称とともに、公会堂、文化会館、郷土館が立ち並ぶ丘がある。ここは、町の生涯学習発信基地ともなっている。社会教育施設としての豊玉町郷土館には、豊玉町から出土した遺跡の資料や民俗（生活）資料などが展示されている。

博物館は独自の年間事業として様々な企画をしているが、地域の深い理解と郷土愛を育くむために「博物館基礎講座」を開設し、学校の社会科を中心とした教科指導との積極的な融合学習を進めている。授業実施前は郷土館の担当者と学級担任が綿密にうち合わせ、施設の側からワークシートを作成して提供するなど配慮がなされている。また、子供たちは収蔵された郷土資料に直接ふれて先人の知恵に感動したり、担当者の指導による体験学習によって授業の充実が図られている。特に、学期に１回以上をカリキュラムに位置づけて郷土館を教室として活用し、自主的な調べ学習が展開できるようにしている。特に、３年生の町の昔調べや６年生の歴史単元で実施されている。今後、地域ボランテアの組織化なども考えられている。

＜社会科と少年自然の家との融合学習＞

世知原少年自然の家では６年生社会科「古代人の暮らし」に思いをはせ、摩擦熱や太陽光線を利用して火を起こす体験活動との融合学習が展開されるようプログラムが提案されている。追体験を通して古代に生きた先人の知恵と工夫にふれることにより体験的に深く学習ができる。

（２） 道徳における実践（相川）

変動の激しい社会において，人間らしくより良く生きる力を具体的な体験活動や主体的な学習活動を通して身につけられるようにすることが肝要である。人間らしくより良く生きるということは，人間らしさの根源である道徳的価値の実現をめざして生きることである。道徳的価値の実現は具体的な体験を伴う。豊かな体験の充実こそが道徳性の育成につながらなければならないのである。今日の子供たちの状況をみると，社会体験や自然体験は特に，心の癒し，感謝する心，大志をもち社会の一員としての生きる力の育成に大きな役割を果たす。自然体験や社会体験の中で人としてさまざまな生き方を学ぶ。地域とのかかわり，地域の人々とのかかわりの中でさまざまな夢や希望を育む取り組みをいっそう充実させる必要があろう。その際人間らしさの根源となる道徳的価値の自覚を深める計画的発展的に行う道徳の時間の役割が重要である。平成１３年度から取り組まれている「学校教育における体験的活動等総合推進事業」や「学校と地域を通じた奉仕活動推進事業」も
以上のような観点から充実させていく必要がある。そのために，学校だけでなく，地域や保護者もさまざまな体験の場を自ら設定し，道徳性を高める実践を大いに展開し，三者で交流しあいながらそれぞれの場で共通の視点で育てていくことが重要である。

＜学校の願い・地域の願い＞

県南西部に位置し，東は長崎市，北は大村湾に面した農村地域である。しかし，都市化の影響を受け，中小企業の進出や住宅団地化などで，保護者の職種は多様化している。そのため，依然に比べて保護者の考え方も多様でドライな言動をする親も増えてきたが，まだ保護者や地域の人々は，大半は時津北小学校を「おらが学校」という思いを強くもっている。子どもの健全育成に対する関心が強く，学校行事や交通安全指導やＰＴＡ活動について協力的である。

子どもたちは，不登校もなく，明るく素直である。基本的生活習慣の定着の弱さ，相手の立場を考えた言動にやや乏しい面はみられる。これらは，学校生活における人間関係や家庭生活におけるしつけ，地域社会からの情報提供等，総合的な視点から人としての価値観や倫理観を育む必要がある。

以上のような実態から，児童一人一人に「正しい価値判断をする力」や「心豊かな感じ方」を育てる道徳教育の充実とたくましい体づくりが急務であると考え、心豊かでたくましい子どもの育成をめざした道徳教育を推進している。

＜学社融合の視点＞

学校教育が目指す大事な要素は，心の教育そのものである。思いやる心や命を大切にする心の育成は，体験を通して共感的に理解させることが重要である。具体的には，ボランテイア活動を行ったり，異年齢集団の中で多彩な体験活動を行ったり，家庭や地域社会の連携によるふれあい活動を継続して行うことである。これらの活動を道徳的実践力を養う道徳の時間と結合させればその効果は倍増する。体験活動と道徳の時間の有機的な結合は学校だけでなく，地域・ＰＴＡの支援なくしてありえない。三者

が手を携えて豊かな心の育成を基盤にすえた取り組みを行っていくことにより社会の変化に主体的に対応できる能力が子供たちに育っていくと考える。さらに三者が一体となるときより高い効果が表れるものである。三者が一体となるということは，学校が中心に取り組む道徳教育から，親や地域が自ら取り組み，自ら発信し合い実践し合い，学校・地域・親が融合することである。

＜具体的な取り組み＞

①　学校保健委員会と道徳教育

児童の健康増進に必要な指導及び援助を行うために学校保健委員会という組織をつくり

活動している。構成員は学校医，歯科医，薬剤師，Ｐ代表，民生委員，自治会長，老人会，栄養職員，保育関係者，行政関係者，公民館長，健全育成会長，子供会長，教職員全員で子供の健やかな体作りをめざすための情報交換や助言をもらっている。

本年度のテーマとして「生活習慣を見直そう」～家庭地域との連携を図りながら取り組む健康的な睡眠をめざして～を掲げ，各学級で子どもの目標と保護者の目標をそれぞれたて取り組むことにした。子どもの目標例として「九時半までには寝よう　保護者の目標例として「九時半までには声をかけよう」など各学級ＰＴＡで話し合って実践し，２回目３回目では中間報告をしている。その間，道徳の時間で節度節制という価値内容で授業をし価値の自覚化を図ると共に保護者も道徳参観をし意識を高揚させ，学級ＰＴＡ集会で家庭での取り組み実践を確認した。夏休み中は公民館長や子供会連協会長中心に子供会単位でラジオ体操会を６時半に実施し早く寝るよう啓発する取り組みで，休み中の子どもたちの生活リズムの乱れを少しでもくいとめることができた。夏休み中のラジオ体操の参加者もいつもより常時多かったようである。

２学期再度同じ価値内容でさらに価値の自覚化を図り，実践評価し，意識の継続を図り，３回目の学校保健委員会では学校，家庭，子供会，公民館での取り組みについて反省し，対策を講じている。各地区の健全育成協議会の講演会でも意向を受け子どもの健康について取り上げ，家庭教育の大切さとりわけ生活習慣や食習慣の重要性についてふれていただいた。家族構成の違い，両親共働きという現状で，テレビ，ゲーム，遅い夕食などで浸透しにくい原因を取り除き進めるには，親子の意識改革によることが大きい。学級ＰＴＡなどに来られる保護者よりもいつも顔を見せない保護者家庭に対する対策をどうするかが課題である。

②　豊かな体験活動

「郷土の過去・現在を見つめ，未来を語る子供たちを育てよう」をテーマに，芋作り・かんころ作り・米作り・障害児等施設訪問交流学習・ペーロン体験地域学習等地域のゲストテイーチャーとの連絡会をもちながら道徳性を高める場を設定している。

また，９地区に校長・教頭はもちろん各担当教師も参加し，健全育成にむけ，３者情報交換をしあいながらみんなで育てる協力体制をとっている。

〈成果と課題＞

保護者も地域も良き教育者という共通理解のもと，地域の人材を生かし，関係機関

との連携を広げながら，道徳教育の充実を図ってきた。バス通学の子供たちのあいさつのよさやバスの中でのマナーのよさ，高学年と低学年の温かい関係などについて地域の方やお客から投書や電話いただく。着実に道徳教育の効果が表れてきている。しかし，全校児童がそうであるかというと十分ではない。実態をしっかり把握し，原因を分析し課題を見出し解決策を考えても学校リードの道徳教育だけでは限界を感じる。

これまでの連携から今一歩踏み込み，課題解決をもっと家庭・地域にも考えてもらい，自分たちの宿題として自分たちで取り組む体制を作ることからはじめなければならない。

（3） 特別活動における実践（城戸）

学習指導要領によると，特別活動の目標は，「望ましい集団活動を通して，心身の調和のとれた発達と個性の伸長を図るとともに，集団の一員としての自覚を深め，協力してよりよい生活を築こうとする自主的，実践的な態度を育てる。」であるが，その内容においては，「開かれた学校づくりを進めるため，地域や学校の実態に応じ，家庭や地域の協力を得るなど家庭や地域との連携を深めること。」と示されている。

つまり，児童会活動，クラブ活動及び学校行事の内容の特質上，特に地域や学校の実態を十分把握し，それを生かして指導計画を作成し，実施することが効果的な場合が多いということで，家庭や地域と協力し連携を深めながら，児童が自然や文化との触れ合い，地域の人々との幅広い交流などができるよう，社会教育施設等の活用などを工夫し，自然体験や社会体験などの充実を図ることが必要であろう。活動そのものが学校内にのみ止まっていてはその目標を達成すること困難になってきているわけだ。

以上のようなことから特別活動は，学校と家庭・地域社会との間に立って，両者の間を結ぶ重要な役割を期待されている。学社融合した形で特別活動の各活動に取り組むことは，地域コミュニティ復活の近道になるであろう。

① クラブ活動における実践（金谷・城戸）

クラブ活動とは，「同好の児童が，所属する集団の生活を楽しく豊かなものにしようとする意図の下に，共通の興味・関心を追求する活動を自発的，自治的に行うことによって，自主性と社会性を養い，個性の伸長を図る。」ことをねらいとした活動である。これは，児童が学校を離れて地域においても学校での活動を発展的に行うことができる面をもち，地域社会の人材や施設，様々な活動との連携を図った地域における活動として展開される可能性をもつものとも考えられる。

学校生活の中でのクラブ活動は子供たちがとても楽しみにし，生き生きと活動する時間である。従来学校では，子供たちの希望を元に教師の指導能力を考えながらクラブ種目を決定する。場合によっては，子供の希望通りの指導体制が整わず，設立できないクラブもある。そこに地域の方々が講師陣に加わっていただけるとその問題は半減するのである。

＜現状の活動＞

長崎市立戸町小学校のクラブ活動は，現在第１・３土曜日の10時から11時半まで行われている。４年生以上の303名の子どもが18のクラブに別れて，12名の教師と，40名のクラブボランティア（地域住民）の指導のもと年間11回・全22単位時間の活動を実施している。卓球・バドミントンなどのスポーツクラブや，料理・将棋・手芸などの文化クラブがあるのはもちろんのこと，英会話・郷土芸能・茶道・華道といったクラブも編成されている。このような専門的な知識・技能を要するクラブ活動は，ボランティアの方々の協力あってこそ編成されているわけだが，子どもは知識・技能以外にも，人としての生き方や社会規範などを学ぶ良い機会になっている。

茶道クラブの15名の子供たちと先生は，近所のお茶の先生のお宅へ出かけていく。茶道は日本文化の集大成といわれている。お茶室の環境は簡素な中に書・花などが配置されている。子供たち使用させていただいている茶道具も全部本物である。学校でできる準備ではない。そんな環境の中で正座をし真剣な顔つきをしてお点前をしている子供たちである。将棋クラブの指導は日本将棋連盟長崎支部の支部長さん，野球の指導は元中学校の野球部の監督さん，郷土芸能は保存会の皆さん，折り紙クラブはご夫妻と，実に専門性の高いクラブである。地域の教育力の高さを感じることができる。この力を有効に活用することでクラブ活動に広がりがで，より多くの子供の要望にも答えることができている。

＜成果と課題＞

各クラブを通じて，子供たちと地域の方々，保護者との温かい交流が生まれている。その交流は学校内に留まらず町の・校区のあちらこちらで子どもたちに注がれている。「おはよう」「元気？」等の声かけが行われ，子供たちは見守られていることを実感し，その安心感がよりおおらかで気持ちにゆとりある子供へと変容しつつある。大人たちは，「ただ教えるだけでは地域住民によるボランティアの意味がない。道で会った時に声を掛け合える関係を築くことが大事である。」といい，また，「回を増すごとに子供たちと近づき，自分自身に活力を与えられ，自分自身成長していくことができる」と話される。

ボランティアの方々は，クラブ活動の当日早朝から身支度をし，いろいろな道具を持参し育英会室に集まる。そこには，この活動を支援する育英会の会員が待機しており，お茶を出しながらいろいろな話を伺ったり情報の提供をしたりしていっそう和やかな雰囲気のもと連携を深めている。子どもは大いに成長するわけだが，地域の方々も子どもから若さを吸い取り，忘れかけていた感動を呼び戻している。まだまだ子どもには負けられない，そういう意識で新しい生き甲斐を見つけたといってくださる方もおられる。子どもが成長するとともに，地域住民も若返り成長するという好循環が起こっていると言えよう。

次年度からは完全学校週５日制になり家庭や地域の教育力がこれまで以上に必要とされるのは明らかである。「戸町小学校クラブ活動のためのクラブボランティア」から「戸町地区の子どもを地域で育てるためのクラブボランティア」へと，将来は学

校教育活動の中だけに留まらず，週休日開催に移行できる「戸町子どもコミュニティークラブ」として活動できるように，学校・保護者そして地域が一体となって子どもを育てるための計画も整いつつある。今後もより高い目標に向かって進めていかなければならない。

② 学校行事における実践（沖崎）

＜鍋冠運動会＞

平成11年度から本校（浪平小）の運動会は，今まで行っていた運動会から学校・地域・ＰＴＡが一体となった運動会を行うようになった。数年前は学校の運動会と地域の運動会が別々にあったことや，児童数の減少によって運動会の出場種目が増え，子どもにかかる負担が大きくなってきたこともあった。このような経緯もあったが一番の目的としては，学校と地域・ＰＴＡが一体となり運動会に取り組むことであり，子どもを教師や保護者だけでなく，ＰＴＡや地域の方々みんなで見守り育てていこうとすることにあった。子どもたちや地域・ＰＴＡの方々が競技を行い，一生懸命な姿にはみんなで声援を贈り，楽しい場面にはみんなで笑う。運動会で必要な係（招集や決勝など）も学校と地域・ＰＴＡも入り協力して行い，みんなで作り上げる運動会をめざした。

＜実行委員会の設置＞

この運動会に移行するにあたり，平成11年度にはまず、本校の校区の７ヶ町の自治会長に趣意書を送り協力を要請し，実行委員会を組織した。実行委員長をＰＴＡ会長にして，育成協議会とＰＴＡ役員と学校職員から構成した。第１回目の招集は学校して，実行委員長選出，種目とその責任者の決定，係の担当について，今後の日程の確認を行った。２回目の話合いまでに，競技にでるメンバーを決定してメンバー表を学校が作成した。第２回実行委員会では，種目説明，係内容説明，メンバーの確認を行った。第３回実行委員会では，用具を作成した。第４回実行委員会では，各係の打ち合わせ，最終確認を行った。平成12年度には，老人会が実行委員会に入り企画・運営での協力体制を強くした。

〈プログラム・種目〉

学校の種目を15でＰ・地の種目を９にして合計26プログラムにした。Ｐ・地種目には，子どもも１種目は出場できるようにしている。

本校には縦割班があるので，学校種目は縦割班対抗で行い，Ｐ・地種目は７地区を３つに分けて行っている。縦割班対抗にすると，子どものいない地域の方が競技参加しにくいし，地区対抗では児童数に偏りがあり均等に分けることができないので，縦割班対抗と地区対抗を行っている。

種目は綱引き（大人のみ），鈴割（大人と子ども），大玉転がし（大人と子ども），元気が一番（幼児種目），宝釣（老人種目），地区対抗リレー（10代～50代）のようなオーソドックスな競技もあるが，次にあげる種目は大人と子どもがよりふれあえる種目である。障害物走（くわえて　食べて）はカードの数字があった大人と子どもがペアーになり，大人が風船をふくらまし，子どもがわる。そして大人が子どもをおん

ぶして子どもがパンを食べてゴールする。　借り者競争は，子どもがカードに書かれた３人の大人を連れてきてゴールする。騎馬戦は，いつも騎馬役になってしまう大きい子どもが上に乗れるように大人を騎馬になってもらっている。また，係はＰＴＡが中心だが13年度からは本校を卒業した中学生が受け持つようになった。11年度から応援にくる中学生が増え，12年度からは手伝いや競技に積極的に参加するようになってきた。13年度は開会式入場の行進曲をブラスバンド部が演奏したり，最後まで参加した中学生が運動会終了後も，テント運びやサッカーゴール運びなどの後片づけにも協力していた。運動会の打ち上げは，当日に教師は教師だけ後日に地域・ＰＴＡが行っていたが，12年度からは，地域・ＰＴＡ，教職員，子ども，中学生などの運動会参加者全員で行うようにした。

＜成果と課題＞

この運動会を通して，学校は開放されていると実感している。12年度，学校にあった「コッコデショ」を使おうとしたが，とても重くて悩んでいたら地域の方が，ほんの２～３日で形はもとのままで，一回り小さい「コッコデショ」にしてくれたり，運動会前にはいつも悩みの種になっていた除草作業を，12年度からは老人会の方々が引き受けてくれるようになった。このような協力の輪が広がりは，運動会以外でも見られるようになった。学校が開放することで多くの方が学校に入ってこれるようになった。火曜日と金曜日の放課後はふれあいの時間として地域の方が空き教室を利用して伝承遊びを教えてくれたり，図工で竹とんぼを作る時も地域の方が指導に来てくれた。学校だけでなく，浪平小学校地区みんなで子どもの教育に携わる風土ができてきたように思う。

12年度までは学校の運動会を浪平小運動会，地域の運動会を鍋冠運動会と分けて言っていたが，13年度からは鍋冠運動会とまとめて呼ぶことになった。閉会式のあいさつは校長ではなく実行委員長が行い，万歳三唱は育成協議会会長が行うようになった。まだまだ学校が主体であるが，地域主体に徐々に近づけていきたい。

（４）　総合的な学習における実践（長田）

～学社融合を通して広く，深い「生きる力」を育てたい～

「総合的な学習の時間」が平成14年度から完全実施される。移行期である平成12～13年度，小佐々町立楠栖小学校でも学校・地域・児童等の実態をもとに地域の「ひと」「もの」「こと」を生かした本校独自の「総合的な学習の時間」を実践してきた。

本稿で紹介する楠栖小学校・長崎市立横尾小学校の実践事例における，「『総合的な学習の時間』のねらい」は，次の３点である。

○「学校」から「地域・町」への「元気発信」

○「地域・町おこし人」の育成

○「地域・町の産業・文化」の継承，発展

「学社融合」の考え方は，このように学校と地域が，「目標」「活動内容」「活動の場」「活動の時間」等において重なる部分をもとに活動し，更に重なりの部分を広げていくことであろう。

ここで紹介する事例は，地域学習単元である「『進め！小佐々の海の調査隊』（楠栖小学校５年）」「『横尾だんじり』（横尾小学校４年）」の実践事例である。

これまで，学校が地域の「ひと」「もの」「こと」の教育力を借りて，児童のための「地域学習」を求めてきていたが，更に，ここでの実践では，学校と地域が一緒に活動することで，「地域，町のよさ発見」や「地域愛」「自分自身への自信・誇り」「友だちの『よさ』」を共有し合う。そして，地域・町が元気になる，さらには，将来，地域・町に残って発展を担う後継者になる等，学社融合の取組で，広く，深い意味の「生きる力」を育てたい。

①「進め！小佐々の海の調査隊」（５年）の取組（鈴田）

＜はじめに＞

小佐々町立楠栖小学校は北九十九島を眼前にする海に面した学校である。小佐々町は，日本本土最西端の町として有名であり，基幹産業が漁業とイリコ製造(生産高日本一)の町でもある。

本校における総合的な学習の時間の導入にあたっては，この海を活用し，この小さな町の町おこしの一部を児童に担わせる方法を求めて全職員で検討を重ねてきた。

ここでは，５年生『進め！小佐々の海の調査隊』について紹介をする。

＜活動の実際＞

海は，小佐々町にとって生活の基盤とも言える重要な位置を占めている。また海は，児童にとっても，日頃から釣りに興じたり，磯遊びをしたりと日常生活の一部として存在している。しかし，あまりにも身近であるがゆえに，海の持つそのすばらしさや大切さには気づいていないような感じが見受けられていた。

そこで，手始めに，町内にあるB&G海洋センターの施設を利用して海洋スポーツを体験する活動を取り入れた。カヌー・ペーロン・バナナボート等のマリンレジャー活動を通して，海の楽しさを思う存分楽しませた。それと同時に，生命の安全保持のためのルールやマナーについても学習させた。

その後，児童の課題意識が深まるとともに，『進め！小佐々の海の調査隊』へと変わっていった。それぞれの児童が自分の調べてみたいテーマを見出し学習を進めていった。テーマは児童の意見集約を重ねながら，大きく次の4つを設定した。この「生き物」「環境」「ごみ」「魚」というテーマにしたがって児童は，様々な方法で学習に取り組んだ。

ある児童は，小佐々の海の現状を知るために，漁業協同組合に手紙を送り自分たちのわからないことや疑問に対する資料や回答をお願いした。また，地域の人や役場の人への質問をしてきた児童もいた。事前の段階では，職員が町産業課長や漁協長と会い，町の現状や取組，課題や問題点等について，直接話を聞き，児童の課題意識を高めるための準備も行ってきた。

これらの資料を元にして，児童は，様々な観点から小佐々の海の現状について調査し，まとめ上げた。「生き物」班の児童は磯や砂浜や海岸近くの海に住む生き物たちをデジカメで撮影し，その特徴について図書室で調べ，パソコンを使い『小佐々

の海の生き物図鑑』を作成した。「環境」班は，小佐々の海水と他の地区の海水等とを比較して海の環境問題へと目を向けていった。「ごみ」班は，近くの海岸や漁港に行き，海中に投棄されたごみを調査し，自分たちの日常生活を振り返りながら，今自分たちがしなければならないこと，今自分たちにできることについてまとめ上げた。「魚」班は，いりこ生産高日本一の小佐々の漁業・産業の現状を調べ，今後の発展のための問題点や課題(漁獲量の減少・藻場の減少・環境汚染)について考えた。

その成果は，楠っ子フェスティバル(学習発表会)の場で地域の方々や保護者に広く報告する活動へと広がりを見せた。さらに，地域おこしの観点から，小佐々の海のすばらしさをもっと広く伝えるための活動として，Ｗｅｂ上での情報発信や新聞発行，ポスター掲示という活動に発展していった。

＜学社融合の視点から＞

総合的な学習の時間の活動を通して，以下のような様々な成果が見られた。

児童の立場からは，地域の人から指導を受けることで，自分たちの町のよさを知り自分たちの町をよりよくしていこうという想いを強く持つようになったということ。

地域の立場から見ると，研究授業等を地域の方（保護者・学校評議員・町教育委員・社会教育主事担当の公民館主事等）に公開することで，地域全体が児童を育てているという意識を持つようになった。また，漁協婦人部の方等からは，「自分が勉強になった。小学生と一緒に自分たちも勉強したい。」という意見も多く聞かれた。

教師の立場から校内における研修のみでなく，積極的に地域に出て，地域の人と関わる中で教材開発が進められるようになり，多様な展開が可能になった。

しかしながら，児童に地域おこしの一翼を担わせるためにはまだまだ経験不足は否めない。もっと地域の「ひと」「もの」「こと」に出会わせる必要がある。例えば，特産品であるいりこを使ったおやつ作りや料理作りを地域の漁協婦人部の方々と実践する，海の環境を汚さない洗剤作りを地域の人々と実践していくなど，まだまだ多様な体験を通して児童の小佐々町への想いをより強く，より深いものへと高めることができるだろう。今後も，地域と一体となり町おこしのため児童の秘めた可能性を引き出す工夫に努めていきたい。

②　「横尾だんじり」（４年）の取組（金谷）

＜横尾だんじり＞

横尾地区は，30数年前に団地造成が行われ長崎市のベットタウンとして発展した。人口流動の激しい地区で，地域として成熟しているところではないが，都市型としての自治組織もきちんと整備され機能している。また，そこに住む人々に「我が故郷横尾」の思いを抱かせる様々な取組も行われている。ここで述べる「横尾だんじり」もその一つである。

長い歴史を持つ「だんじり」であるが，地域の伝統芸能として定着をしているわけではない。一時途絶えていたが地域の伝統文化として伝え，横尾の歴史を創ることを願い，10年前に当時のメンバーが保存会を結成し，現在にいたっている。現状として

は，地域全域に浸透し，郷土芸能として育てていこうとする意識の高まりまでにはいたっていない。保存会の方々の課題としては，やはり「横尾だんじり」を通して，伝統文化の継承や，郷土愛の育成をいかにして図るかということである。子どもたちが伝統文化を学び，その継承役となり，横尾の発展につながることを望んでいる。

＜総合的な学習としての取組＞

子供たちの住む地域に視点を当て教材化し学習を進める中で，「生きる力」を育むことを目的として，４年生の総合学習で取り上げた。

学社融合の形の学習が円滑に計画的に継続して実践されるためには，組織作りが非常に重要となる。そこでまず第１回の顔合わせを行い，組織･練習計画を明確にした。出席者は，管理職・総合学習主任(地域主任)・担任・だんじり保存会役員である。その後連絡系統の単線化を図った。また，子どもが自ら学ぶ意欲を高める工夫，意欲の継続の工夫，指導者との交流とそれから生まれる地域とのつながりの深まりや広がりを意識した学習方法の工夫など十分協議を重ねながら実践を行っていった。発表の場を秋の中間発表･５年生になっての運動会とした。さらには新４年生に保存会の方と共に指導する計画である。伝統文化を学びそれを自分たちで継承することを子どもたちの心に育てていくのである。学習の場は学校であり，太鼓や笛摺り鉦など全て保存会の方々から借用し，常に１０名前後の指導者から直接指導を受けることができた。学習を進める中で，子供たちは，地域の人々の思いに触れ，横尾の歴史を学び，技術を学ぶことを通して，「横尾だんじり」を好きになり，地域の人々に尊敬の念を抱き，「わが町横尾」の思いを強くしてきている。１２月の「よこおっ子まつり」での発表は，保存会の方々と子供たちが一つになり，地域･保護者に大きな感動を与えた。

＜学社融合の視点から＞

地域を学ぶ拠点を学校(子供)に置くことで，人・伝統・文化を含めた愛郷心が子供の姿や声として具体的にしかも広く伝わっていく。今回の取組も，さらに多くの地域住民とりわけ保護者にその思いを伝えることが出来た。保護者の中に子供たちと共に「横尾だんじり」を学ぼうとする気運が高まり，支援組織が出来つつある。また，横尾地区の伝統文化として大切に継承していこうとする地域全体の意識も確認することが出来た。新興住宅地である横尾の人々に「ふるさとのにおい･色」を育てる重要な役割を果たしていると考える。もちろん子供たち自身が主体的に生き生きと郷土を学び，故郷を愛する心を育てていただいている。地域と子供たちが共に輝きまたその輝きが新たな輝きを生む取組みとなっている。

２．地域からのアプローチ（岡田）

『「霞翠(かすい)の子どもは私たち大人がみんなで育てていけたらと思っちょります。」と心から言ってくださる地域の人たちに支えられて，子どもたちは成長していくことを実感し，感謝の気持ちでいっぱいになります。』

これは霞翠小学校の生涯学習主任の言葉である。私たち教師は，ともすると『子どもを育ててやっている』という錯覚におちいる事がある。また，『自分がこの子たち

を何とかしなければいけない』という強い義務感から何でも教師が抱え込んでしまう場合もある。

一人の人間の成長に，一教師が関われる時間というのは，どれくらいのものであろうか。真っ白な心の子どもたちは，学校の環境が変わったり，家庭の環境が変わったりすると，良くも悪くもなることは御承知の通りである。学校の中と外とでも子どもたちの様子はまったく違う場合もある。教師は，一人の人間が立派に成長するための通過点でもある。しかし，家族や地域の人々の存在はそうはいかない。地域の方が，一人の人間と幼い時から関わり続けることで，様々な成長の段階を見届ける事になる。しかし「地域の皆さん、子どもたちに関わってください。」と言われても具体的に何をしたらよいのか分からない。そこで、生きがいづくりの生涯学習の登場ということになる。

地域には様々な生きざまをもった方がいる。また、様々な特技や専門性を持った方もいる。こう言った人材を地域の生きた教育力として，子どもたちに提供することができる。　子どもたちの前に立つのをためらう方は，自分自身が得意とする分野で学校支援ボランティアとなり，子どもたちの学習の支援や学校環境の整備をサポートすることができる。また従来大人だけをターゲットにしていた公民館講座等を昼間の学校で実施することで自然に地域の方と子どもたちの交流も可能になる。

私ども行政の役割は，地域の方の足が学校へ向くようにする事，一人でも多くの教職員に地域社会の大切さを知ってもらう事，そして行政自身が協働の精神で実際に動く事だと思っている。本町では，独自の学社融合推進の中で，地域の『ひと』の活性化のため次のような事業を展開してきた。

（1）　幼稚園・小中学校への外部講師派遣

地域にはそれぞれの分野の達人がいる。勝本町をはじめ，壱岐の島には、実に多彩な人材がいる。これらの情報に強い社会教育と総合的な学習の時間の登場で情報を欲している学校がともに協力し，勝本町民にアンケートをして，町内外の人材のデータベース化を図った。いわゆる人材活用バンクである。米・野菜・花づくり，漁業，郷土料理・国際料理，手話・点字，伝統技術，伝統芸能，陶芸・絵画・書道・押し花・絵手紙，伝統音楽，英会話，スポーツ，パソコン等々その種類の多さにはびっくりするほどの数である。教師は万能ではないので、自分より専門性を持つ人を講師として招き，学校外の本物と子どもとの出会いをプロデュースする。本町における外部講師派遣は、現在、年間200時間あまりの活用を誇る学校教育課程への支援活動となっている。

しかし，外部講師を導入するにあたっては，事前打ち合わせが不可欠である。これは、教師にとって人材発掘と並んで，負担となっている。そこで、平成13年度の授業をプログラム（授業略案）としてデータベースに追加してみた。一部の授業では，写真や動画により，外部講師とのやりとりも記録されている。その他，勝本町役場や社会福祉協議会，警察，消防等の外部団体においても出前講座のような形でプログラム化している。派遣申請用紙や会場借用の様式もすべてＣＤ－ＲＯＭ一枚に収めている。

新しく勝本町へ赴任した教師や新しく社会教育に携わる事になった職員も自身のパソコンで簡単に様子が分かる。本年度関わる教師はなれるまでたいへんではあるが、今後のスリム化のため、また、『後から来るもののために』を合い言葉に，プログラムバンクの制作と外部講師の発掘・活用にがんばっていただいてます。

（2） 生涯楽習～学校へ行こう～

学校は，税金によって設置・運営されているという認識のもとに，学校教育に支障がない範囲で，学校施設等を生涯学習に有効利用することが求められている。英語，古典，美術，歴史，家庭，図工，体育，総合的な学習の時間，クラブ活動，委員会活動などの様々な時間に，地域住民が，児童・生徒と一緒に参加して，楽しく学んでいる。私たちはあえて『楽』という字を用い，この事業を「生涯楽習～学校へ行こう～」と呼んでいる。講師は学校の教員や地域の達人，それに子どもたちである。

学校の教員が地域にもニーズのある授業（町民アンケートにより「英会話」「古典」「歴史」を実施）を公開する事により，その専門性を地域の方にも提供できた。普段の授業に地域の方も生徒として招くだけなので気負わなければ時間的な負担もない。参加された地域の方も，「学生に戻ったようでなつかしい。」「子どもたちと一緒で楽しかった。」と喜んでいる。しかし、教室に地域の方がおられることに精神的負担をもつ教員もいる。そこで事前に実施可能かどうか十分話し合いの時間を持つ。「お互いにメリットがある」のが学社融合の精神でもあり、『いやなものは「NO」と言える関係』も大切にしたい。

一方，地域の達人たちも，陶芸教室，フランス料理教室，しめ縄・門松づくり教室，ガーデニング教室，ペタンク講習会と「学校へ行こう」講座に多数貢献してもらった。シェフによるフランス料理や食改グループによる親子料理教室は特に大好評で，参加した地域の方や保護者は，子どもの調理の支援者にもなっていった。クラブ活動のパソコン学習では，子どもたちが先生となり，老人クラブのお年寄りに指導する場面もある。

また，陶芸教室から発展し，陶芸釜がある勝本中学校の生徒会室に陶芸制作スペースを作り，「勝本中陶芸サークル」を発足させた。現在30名の地域会員の方たちが日中の学校が開いている時に活動している。現在は、まだ自分たちの技能を磨いている段階だが，近い将来には昼休みにひょっこり中学生がやってきて，土こねあいながらの交流が実現できると思われる。鯨伏中学校のパソコン室は，次項で詳しく説明している学校支援パソコンボランティアの定例勉強会の会場となっている。

（3） 学校支援ボランティアの養成

前述の外部講師は学校のお手伝いであり，いわゆる『社会人活用』と言える。学校支援ボランティアは「生涯楽習」の参加者と同様，自分の主体性によって行動する。だから，ボランティアと学校側の両方のニーズがあわないと活動が成立しないことになる。何より学校が「地域の住民に対して活動の場を提供しよう」という意識に立たない限り、進行できない。

現在勝本町では，鯨伏小学校を中心に活動している図書ボランティア（保護者と地

域の方からなる団体で名称等は現時点では決まっていない）と三つの小学校で活動しているパソコンボランティア「スマイルマウス」がある。

図書ボランティアは，昼休みの鯨伏小学校図書室で定期的に読み聞かせをしたり，図書室の環境整備をしたり精力的に活動している。このボランティアができたきっかけは，学社融合推進事業の一環である，学社融合情報提供活動であった。勝本町教育委員会が月１回発行している「勝教だより」で学社融合についての情報を発信する中で「学校へ足を運びませんか？」としつこいくらいに呼びかけた。そんな中、読書活動に興味のある鯨伏小学校の保護者が相談にこられた。「子どもたちに本のすばらしさを伝えたい。」「学校に私の方から入って行きにくい。」とおっしゃるその方の話を学校側に伝えた。学校では、もともと読書活動に力を入れており，その部分で特色を出そうとしていたので，快いお返事が返ってきた。

本町では校区内にお住まいの地域住民にも小・中学校のたよりを回覧しているので，その紙面で，図書ボランティアを募集し，保護者以外の地域の方々も参加できるようにした。　パソコンボランティアは国が推進しているＩＴ講習会の受講者を中心に組織され，小学校の授業中の子どもたちを支援する事によって，自分の技能を高めようと活動を始めた。当初，学校とボランティアをつなぐコーディネートは私がつとめていたが、現在では会員の中から各学校の担当者を決め，電子メールを使って，各小学校の生涯学習主任と日程調整をするようになった。小学生へのボランティア活動で上手に教えられなかった事を中心に月に１回の例会を鯨伏中学校のパソコン室で行っている。今，会員間の情報伝達はほとんど電子メールにより行われている。

（４）　小・中学校の生涯学習主任

本町では，各学校の特色を生かしつつ，これらの「ひと」をコーディネートし，開かれた学校づくりをするため，生涯学習主任が全校配置されている。

学社融合推進委員会で提案された数々の提言を，学社融合プロジェクト会議で具現化していく。このプロジェクト会議では、社会教育主事がコーディネート役を務め，各小・中学校の生涯学習主任の先生方と各事業に関わる地域の方々とで，具体的な内容について検討を重ねる。各生涯学習主任は自校の特色をふまえ，実施可能かどうか検討していく事になるが，本町の生涯学習主任の先生方の意気込みには頭が下がる事ばかりだった。「来るものは拒まず」「やらなきゃ，良いも悪いも分からない」「自校の中でだれも立候補しないときは私のクラスだけでも」このような積極的な発言が次から次に飛び出してくる。私どもはもちろん，同席している地域の方々も，口々に「学校の先生方がこれほど一生懸命なら，私たちも全面的に協力しますよ。」という。生涯学習主任の先生方は，学校に戻ってから他の先生方に情報提供し，各学年レベルで話を具体化させていく。分からない事等があると，気軽に私どもに相談の電話や電子メールがくる。地域の方々からも同様である。最近では，生涯学習主任の先生方の方から「こんな事業なんておもしろいと思うんですが，融合できる予算はないですか？」「はじめはあまり興味を示されなかった先生方が，私のクラスの子どもたちが楽しく学習に取り組んでいる姿を見て，やりたいやりたいと言うんですよ！時間数増

やせませんか？」等のラブコールも受けるようになった。今後は小中学校間の情報交換も密にし，一つの学校だけが研究指定で飛び出す「点」ではなく，勝本町全体で「面」としての学社融合の推進ができるよう努力したいと思っている。

Ⅲ．学社融合を進める推進システムの整備（浦川）

地域には施設・事業・指導者・団体・サークル・ボランテア・民間事業所等たくさんの教育資源がある。こういった資源の有効活用によって学校教育も一層充実が図られる。しかし、それらの多くは、独自の理念に基づいて運営され活動しているため即学校に導入することは難かしい。学社融合を進めるためには、学校の理念や学習指導要領あるいはカリキュラムのどの部分でどう関連させていくか、事前に入念な調整が必要である。

また、学社融合の推進力となる担当者の設置や役割、情報の収集・提供、計画立案等総合的な推進システムが求められる。特に、地域全体の教育力向上を目指すためには、教育委員会の方針や学校・公民館の在り方、首長部局を始めとする関係機関や団体と一体となって円滑な推進を図る必要がある。そのために必要な条件整備や改善が求められる。学社融合は、新たな教育システムの創出であるから学社融合をすすめるためには、新たな視点に立って有効に機能するようなシステムの構築を図る必要がある。たとえば、次のような視点が考えられる。

1．推進システムの整備
2．コーディネーターの設置とサポーターの育成
3．地域教育資源のプログラム化
4．情報の提供
5．団体とのネットワーク化
6．企画への参加

1．推進システムの整備

（1） 学社融合推進委員会の設置

長崎県生涯学習審議会では次のような構成員を紹介している。

校長と関係主任，コーディネーター，ＰＴＡ代表，行政関係者，各機関等の責任者や専門的職員及びボランティア代表等で構成する。必要に応じて、専門部会やワーキンググループ等を設置し，より充実した総合的な発想や企画等に取り組むことが現実的であろう。主な活動としては、学社融合推進にかかる基本計画の策定と実施及び多様な体験プログラムを開発する。

（2） 管理（運営）委員会や学習を支援する各種実行委員会の設置

まず、施設ごとに，利用者を中心として管理（運営）委員会を組織し、施設の使い方や施錠の責任者や約束ごと等を決めるなど、円滑で健全な利用ができるように共通理解を図ることが必要である。この場合は、地域に設置されている健全育成のための各種委員会と緊密な連携を図るなど既存の組織を活用することも考えられる。

次に、各教科や領域、総合学習など展開の必要に応じて、推進チームを編成する。

これは具体的に授業実践に携わることができる人たちによって構成する。例えば、学校の音楽の時間と音楽愛好家のサークルとが音楽学習実行委員会を設置して、パート別練習や発展学習など融合学習を進めることにより、合奏や合唱など学習内容の充実を図ることができる。また、余暇の活用にまで拡充することも期待できる。

（3） 学社融合を推進する担当の設置

学社融合を実際にすすめるためには、学校や教育委員会に担当者を設置しておくことが大切である。また、生涯学習の推進に協力してくれる各種機関や団体等に働きかけて、推進担当を位置づけることができるとなお望ましい。担当者は、企画・実践・相談及びその他の連絡調整にあたり、地域の実情に応じた工夫や適切な対応ができる。

（4） 子ども会議の設置

子どもを主体者とした学社融合をすすめるには、子どもに企画立案・推進させることが重要である。子どもたちを「町づくりの同士」として認め、地域課題に積極的に取り組むことができるような機会や場の提供を図りたい。子供たちの活動に全幅の信頼を寄せ、期待を込めて実行させ活動を見守りたい。大人は多くの選択肢を提供するなど支援者としての役割を果たし、責任と実行ある子どもを育みたい。小さい時から社会にであわせる体験こそ今求められている。

2．コーディネーターの設置とサポーターの育成

学社融合をすすめるためには、学校教育と社会教育をつなぐための専門的な知識と学校教育の経験とによって、事業の企画・立案や調整、推進などに当たるコーディネーターが重要な役割を果たす。学校に設置される生涯学習担当の教師や派遣社会教育主事を充てることが望ましいが、公民館、図書館の専門職員等を位置づけることやボランテアとして教師の経験者を充てることも考えられる。コーディネーターに求められる資質は、必要な知識と共に人と人をつなぐ力量や創造性等が期待される。これからは、住民のボランテアやサポーターによって多様な活動が期待される。サポーター等計画的に養成していくことも必要となってくる。

3．地域教育資源のプログラム化

それぞれの地域には学校教育施設や社会教育施設をはじめとする様々な施設や文化財、恒例的に行われる行事また豊かな自然等多種多様な資源がある。こういった地域の教育資源は、学校の学習内容として融合しやすいように、カリキュラムに沿って、プログラム化し、必要に応じて組み立てやすいようにユニット化しておくと活用しやすい。子どもたちに豊かで多彩な学習や体験を提供することができ学校教育の活性化が期待できる。

4．情報の提供

地域には、人材情報，施設情報，講座・事業情報及び地域教育資源のプログラム等様々な情報がある。それぞれの情報を双方が利用しやすいように整理し提供する必

要がある。また、学社融合が新しい教育システム作りであるならばその普及のために広報し啓発に努めなければならない。ある地域では学校便りと公民館便りを表裏に印刷して配布するなど広報活動にも融合の考え方を取り入れているところもある。住民にその事実や状況、課題を認識してもらっておくことによって住民の主体的な参画も期待できる。情報提供は人と人をつなぎ、ネットワークを組織する上でも極めて重要なことである。

5．団体とのネットワーク化

地域には様々な社会教育関係団体やスポーツ団体、文化団体等がある。さらに老人会や商工会などの団体及びＮＰＯと呼ばれる団体もある。学校教育とこれらの団体と融合することによって教育の充実と活性化を図ることができる。それぞれの団体は、融合できる内容をユニット化して提供しておくと、学校教育、地域活動、家庭教育等必要と目的によって多様な融合が展開できる。より有効に機能させるためにも各機関と団体がネットワーク化しておくことが重要である。